

自己成長感尺度作成の試み

An attempt to construct a scale of Growth

信 野 良 太

【問題】

“困難を乗り越えることによって人は成長する”
ということは誰もが経験的に知っていることであ
らう。実際、このような考え方は何千年も前から
宗教や哲学のなかで論じられてきた (Park&
Helgeson, 2006)。Park&Helgeson (2006) の
レビューによると、心理学においてそのことにつ
いてはじめて言及したのは Caplan (1964: 新福
監訳, 1970) であり、Caplan は彼が提唱した
“危機理論”の中で、ネガティブな出来事を経験
から成長が生じる可能性について言及している。
しかし、当時の研究者の関心は危機状況の理解や
予防および健全な対処に向かっており、1990年代
に至るまでそのような研究テーマが見つからない
ことから、危機状況から生じる成長の可能性につ
いて取り上げられることはなかったようである。
ところが、1980年に米国精神医学会 (APA) が
DSM-III (Diagnostic and Statistical Manual
of Mental Disorders: 精神障害の診断と統計の
手引き) に不安障害の新しい診断概念として
PTSD (Post Traumatic Stress Disorder: 心
的外傷後ストレス障害) を登場させたことにより、
PTSD 研究が盛んに行われるようになった (大
塚・中根, 2000)。大塚・中根 (2000) によると、
PTSD 研究はもともと1970年代のヴェトナム戦
争帰還兵に対する研究から始まっていたのだが、
これをきっかけに研究対象は自然災害、犯罪、性
暴力などへと徐々に拡大していくことになった。
ただ、ここでの研究者の関心ももっぱらストレス

やコーピングによるネガティブな結果に向けられ
ていたようである (Park, 1998; Linley&Joseph,
2004)。しかし、PTSD 研究が進むにつれ、
PTSD を引き起こすようなネガティブな出来事
を経験した人の中に、自己概念やコーピングスキ
ル、人間関係の改善といったポジティブな結果を
報告する者がいるという研究結果が多数報告され
るようになった (Park, Cohen&Murch, 1996)。
Linley&Joseph (2004) によると、もしトラウマ
や不幸な出来事についての包括的な理解を目指す
なら、トラウマや不幸な出来事によるネガティブ
な変化と同じくらい、ポジティブな可能性につい
ても説明がなされるべきであろうとの考えが研究
者から出始め、1990年代以降、ネガティブなスト
レスイベントを経験した後に生じるポジティブな
変化に焦点を当てた研究が盛んに行われるよう
になったのである。それは PTG (Post Traumatic
Growth: 心的外傷後の成長) 研究や SRG
(Stress Related Growth: ストレスに関連した
成長) 研究と呼ばれ、米国ではその研究に関する
レビューや本がすでにいくつも出版されている
(Park, 1998; Linley&Joseph, 2004; Park &
Helgeson, 2006)。例えば Linley&Joseph (2004)
は、トラウマや不幸な出来事の後に生じるポジテ
ィブな変化についての実証的な研究をレビューし、
慢性疾患、心臓発作、肺がん、骨髄移植、エイズ、
レイプ、戦争、海難および航空事故、トルネード、
肉親との死別、身体障害、薬物中毒といった、さ
まざまなストレスイベントでポジティブな変化が
報告されていると述べている。

一方、日本においてネガティブなストレス経験

の後に生じるポジティブな変化に焦点を当てた研究はほとんどなされていない。死別経験後の遺族の変化に関する研究（東村・坂口・柏木・恒藤、2001；坂口、2002；渡邊・岡本、2005）や介護による介護者の成長に関する研究（櫻井、1999；川崎・高橋、2006）が挙げられるが、研究の量・質ともに欧米に比べ圧倒的に少ないのが現状である。

日本でも阪神大震災以降、PTSD への関心は高まり、自然災害や事故、病気、最近では児童虐待など PTSD に関する研究は数多く行われている（大塚・中根、2000）。しかし、80年代の米国と同様、研究の焦点はもっぱらネガティブな結果に当てられており、ストレスフルな出来事がポジティブな結果をもたらすという視点での研究は行われていない。ストレスフルな出来事がポジティブな結果をもたらす可能性があることは欧米の先行研究からも明らかなことであり、この領域について研究することはストレス研究に新たな視点をもたらす、より包括的にストレスを理解する上で有意義なことであると思われる。

そこで、本論文ではストレスのポジティブな側面を捉える研究を行う前段階として、尺度の構成を試みる。欧米では、ネガティブなストレスイベントを経験した後に生じるポジティブな変化を測る尺度がいくつも開発されているが、日本では開発されていないからである。欧米の研究では、Park et al. (1996) が開発した『SRGS (Stress-Related Growth Scale : ストレスに関連した成長感尺度)』や Tedeschi & Calhoun (1996) が開発した『PTGI (Posttraumatic Growth Inventory : トラウマとなるような経験の後に生じる成長感尺度)』がよく用いられており、Park et al. (1996) の『SRGS』はさらに Armeli, Gunther & Cohen (2001) によって『RSRGS (Revised Stress-Related Growth Scale)』に改定されている。この『RSRGS』は、調査協力者にここ2年間で起きた最もストレスフルな出来事を想起させ、質問項目 (ex. “My belief in how strong I am. 自分がいかに強いという信念”) について、ストレスフルな出来事によってどれだけ自分が変化したと思うかを “greatly decreased (非

常に減った)” ~ “greatly increased (非常に増えた)” の7段階で評定させるものである。質問項目は43項目から成っており、①Treatment of Others (他者とのかわり)、②Religiousness (宗教性)、③Personal Strength (人格的強さ)、④Belongingness (所属感)、⑤Affect Regulation (情動統制)、⑥Self Understanding (自己理解)、⑦Optimism (楽観性) の7つの下位尺度で構成されている。信頼性係数 α はそれぞれ .67~.90 と内的整合性は満足のいく値を示している尺度と言えるだろう。ところで、宅 (2005) は Park et al. (1996) の SRGS を用いて、高校生の自己成長感 (自分が成長したという感覚) について研究している。宅 (2004・2005) は日本で青年期の自己成長感に関して実証的な研究を行った唯一の研究者であり、高校生がストレス体験を通して自己成長感を得ることを示した。しかし、尺度構成を目的としていないという理由で自己成長感尺度についての詳細な検討は行っていない。

【目的】

そこで本研究では、Armeli et al. (2001) の RSRGS を参考に、日本版の自己成長感尺度を作成することを目的とする。自己成長感は、自らの努力によって苦境や困難な出来事を乗り越えられたときに敏感に感じられるものだと考えられる。苦境や困難な出来事をストレス経験として捉えれば、SRG と同様の概念で説明できると思われる。そこで、本研究では自己成長感を “ストレスフルな出来事のあとに生じる自分が成長したという感覚” と定義し、それを測る尺度を自己成長感尺度と呼ぶことにする。

ところで、米国の SRG 研究においては尺度の単因子性と多因子性が議論されている (Linley & Joseph, 2004 ; Park & Helgeson, 2006)。本研究では自己成長感尺度が多因子構造であることを仮定し、自己成長感とはどのような感覚なのかその構造を確認したい。あわせて、尺度の信頼性と妥当性を検討し、日本人に適用可能であるかについても検討することを目的とする。

研究 1

【方法】

(1) 調査方法および対象者

2006年11～12月にかけて、北星学園大学の学部学生222名を対象に質問紙調査を行った。調査は複数の講義で集団実施し、講義時間内にその場で回収した。本研究の有効回答数は198名（男性89名、女性108名、不明1名；1年生20名、2年生49名、3年生74名、4年生55名；平均年齢20.71歳）であった。

(2) 質問紙の内容

①基本属性（性別、年齢、学年、所属学部）

②自己成長感尺度

Armeli et al. (2001) の作成した RSRGS43項目を和訳し、わかりにくい表現は意味が通るよう修正した。また、RSRGSには“Religiousness”という宗教感に基づく下位尺度3項目が含まれているが、現代の日本人、特に大学生にはそぐわないものと判断して、2項目（“神を信じる”“神を信仰している”）を削除した。残り1項目は平易な表現に修正し、全部で41項目を使用することにした。手続きとしては、まず過去2年間で最も強いストレスイベント⁽¹⁾を選択肢の中から選ばせ、続く41の質問項目に基づき、そのストレスイベントを経験した前後で自分がどのように変化したかを「非常に減った（弱まった）：－3点」～「非常に増えた（強まった）：＋3点」の7件法で回答させた。

注(1) 最も強いストレスイベントの選択肢として用いた項目は、50名の大学生を対象とした予備調査によって見出されたものを使用している。具体的には、「一人暮らし」「アルバイト」「部活・サークル活動」「ボランティア」「実習」「就職活動」「勉強」「ゼミ」「卒論」「留学」「友人関係」「家族関係」「失恋」「病気・けが」「災害・事故」「その他」の16項目である。

③自己肯定意識尺度

自己成長感尺度の構成概念妥当性を測る尺度として、平石（1990）の自己肯定意識尺度を用いた。この尺度には「対自己領域」と「対他者領域」の2つの側面が含まれており、領域毎にそれぞれ3つの下位尺度（対自己領域：「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」、対他者領域：「自己閉鎖性」「自己表明」「被評価意識」）から構成されている。各下位尺度は8項目から成っており、本研究では各下位尺度から因子負荷量が高かった3項目ずつを取り出して使用した。なお、各質問項目には現在の自分がどの程度あてはまるかを「あてはまらない：－2点」～「あてはまる：＋2点」の5件法で回答させた。

【結果】

(1) 自己成長感尺度の因子分析

自己成長感尺度41項目を用いて、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量.40以上であること、複数の因子に.30以上の負荷がまたがっていないこと、解釈可能性を考慮し、19項目4因子構造（累積寄与率63%： $\alpha = .911$ ）を採用した（表1参照）。

第1因子では、ストレスにさらされても動じないといった精神的な安定感に関する項目で高い負荷が示されたため、「自己安定感（ $\alpha = .825$ ）」と命名した。第2因子では、他者に対する誠実なかわり方に関する項目で高い負荷が示されたため、「他者への誠実な態度（ $\alpha = .840$ ）」と命名した。第3因子では、他者とつながっている感覚に関する項目で高い負荷が示されたため、「他者つながり感（ $\alpha = .846$ ）」と命名した。第4因子では、他者に対する尊重や受容に関する項目で高い負荷が示されたため、「他者尊重（ $\alpha = .871$ ）」と命名した。因子間相関は.39～.60と中程度の相関を示しており、特に第2因子は第3・第4因子と.59以上の相関を示していた。

また、元の尺度である RSRGS の各下位尺度は、第1因子には「人格的強さ」と「情動統制」

に関する項目が、第2因子には「他者とのかかわり」に関する項目が、第3因子には「所属感」に関する項目が、第4因子には「他者とのかかわり」に関する項目が、それぞれ含まれていた。

なお、以下の分析には、各因子の項目得点を合計しそれを各因子の項目数で割った下位尺度得点を算出して使用した。

(2) 自己肯定意識尺度との関連

自己肯定意識尺度18項目について、主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、平石（1990）の因子構造と同様の6因子が抽出された（表2参照）。それぞれ元の尺度の因子名を用いて、第1因子は自分の目標に向かう意欲的な態度を意味する「自己実現的態度（ $\alpha=.823$ ）」、

第2因子は他者に自分の心をひらかないことを意味する「自己閉鎖性（ $\alpha=.809$ ）」、第3因子はありのままの自分を受け入れていることを意味する「自己受容（ $\alpha=.796$ ）」、第4因子は他者に気兼ねすることなく自分の意見を表明できることを意味する「自己表明（ $\alpha=.773$ ）」、第5因子は他者からの評価を気にしていることを意味する「被評価意識（ $\alpha=.822$ ）」、第6因子は心が安らかなことを意味する「充実感（ $\alpha=.658$ ）」とした。

次に、各下位尺度得点を算出し、自己成長感尺度と自己肯定意識尺度の各下位尺度の相関をPearsonの積率相関係数（ r ）を用いて算出した（表3参照）。その結果、自己成長感尺度の各下位尺度の中で自己肯定意識尺度の各下位尺度と.30以上の有意な相関が見られたのは、「自己安定感」と「他者つながり感」のみであり、「他者への誠

表1. 研究1における自己成長感尺度の因子分析（主因子法 Promax 回転）

	I	II	III	IV
自己安定感（$\alpha=.825$）				
30. 些細なことで心が乱されないこと	.76	-.01	-.04	-.03
28. 自分にとってよくわからないことにぶつかってもあわてないこと	.68	-.06	.07	.01
13. 悪いことが起こっても気が動転しないこと	.66	-.11	-.06	.19
22. 自分自身に対する信頼感	.63	.09	.07	-.10
17. 落ち着いて生活に取り組むこと	.59	.14	-.07	-.03
9. 何事も自分自身で決められる能力	.57	.05	.05	.04
他者への誠実な態度（$\alpha=.840$）				
27. 人と誠実にやりとりをすること	.01	.82	.00	-.07
24. 人が私に向かって話をしているときには、しっかり聞くこと	-.04	.75	-.06	.02
26. 新しい情報や考えを抵抗なく受け入れること	.16	.69	-.14	.04
25. 人を助けるために手を差し伸べること	.01	.54	.15	.11
14. 自分の行動の結果について考えること	-.05	.52	.06	.14
20. 人生を真剣に受け止めること	.02	.49	.20	-.07
他者つながり感（$\alpha=.846$）				
35. 周囲の人と密接なつながりを持っているという感覚	.02	.01	.82	-.03
34. 居場所があるという感覚	.13	.03	.80	-.13
32. 自分を心配してくれるたくさんの人がいるという認識	-.13	.00	.76	.09
39. 自分にとって特に大事な人との関係の大切さ	.00	-.04	.63	.16
他者尊重（$\alpha=.871$）				
3. 人の感情や信念を尊重すること	.06	-.04	.02	.91
2. 人を受け容れること	.11	-.03	.01	.78
4. 人を思いやること	-.15	.23	.03	.68
因子間相関				
I	—	.55	.49	.39
II		—	.60	.59
III			—	.52
IV				—

実な態度」「他者尊重」とは.30以上の相関は見られなかった。具体的には、「自己安定感」と自己肯定意識尺度の「自己実現的態度」(.31) および「充実感」(.31) の間で弱い正の相関が見られた。また、「他者つながり感」と自己肯定意識尺度の「自己閉鎖性」との間で中程度の負の相関 (-.48)

が、「自己受容」との間では弱い正の相関 (.30) が見られた。

表2. 自己肯定感尺度の因子分析 (主因子法 Promax 回転)

	I	II	III	IV	V	VI
自己実現的態度 ($\alpha=.823$)						
4. 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	.81	.10	.04	.05	.00	.04
5. 情熱をもって何かに取り組んでいる	.81	.04	.01	-.05	-.07	.01
6. 自分には目標というものがない	.74	-.11	-.04	-.06	.00	-.06
自己閉鎖性 ($\alpha=.809$)						
11. 自分は一人ぼっちだと感じる	-.02	.88	.02	.09	-.01	-.02
10. 自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする	.05	.72	-.04	-.05	.11	.05
12. 私は人を信用していない	.00	.70	-.01	-.02	-.02	-.02
自己受容 ($\alpha=.796$)						
3. 自分の個性を素直に受け入れている	-.07	-.01	1.01	-.03	-.01	-.02
2. 自分のよいところもわるいところもありのままに認めることができる	.00	.01	.63	-.07	-.10	.13
1. 自分なりの個性を大切にしている	.16	-.02	.58	.17	.11	-.09
自己表明 ($\alpha=.773$)						
14. 疑問だと感じたらそれらを堂々と言える	-.03	.09	-.01	.92	-.06	-.04
15. 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる	-.08	.02	.02	.77	-.09	.02
13. 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている	.11	-.21	-.01	.53	.20	.08
被評価意識 ($\alpha=.822$)						
16. 人から何か言われたいか、変な目で見られないかと気にしている	-.03	.01	.03	-.04	.84	.00
17. 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている	-.03	.05	-.05	-.01	.77	.01
充実感 ($\alpha=.658$)						
8. 精神的に楽な気分である	-.04	.03	.10	-.08	.03	.78
7. わだかまりがなく、スカッとしている	.04	-.05	-.10	.12	-.04	.63
因子間相関						
I	—	-.34	.45	.39	-.22	.27
II		—	-.28	-.33	.35	-.42
III			—	.42	-.30	.34
IV				—	-.32	.23
V					—	-.33
VI						—

表3. 自己成長感尺度と自己肯定意識尺度の各下位尺度間の相関係数

	自己安定感	他者への誠実な態度	他者つながり感	他者尊重
自己実現的態度	.31 ***	.19 **	.27 ***	.23 **
自己閉鎖性	-.22 **	-.11	-.48 ***	-.24 **
自己受容	.28 ***	.15 *	.30 ***	.19 **
自己表明	.21 **	.07	.27 ***	.10
被評価意識	-.17 *	.15 *	-.10	.00
充実感	.31 ***	.04	.22 **	.12 †

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

研究 2

【方法】

(1) 調査方法および対象者

2007年6月、北星学園大学の学部学生181名を対象に質問紙調査を行った。調査は2つの講義の講義時間内に集団実施し、その場で回収した。本研究の有効回答数は170名（男性44名、女性126名；1年生92名、2年生69名、3年生6名、4年生3名：平均年齢18.9歳）であった。

(2) 質問紙の内容

①基本属性（性別、年齢、学年、所属学部）

②自己成長感尺度

研究1と同様のものを使用した⁽²⁾。ただし、自己成長感得点（自己成長感尺度41項目の項目得点を合計した得点）と自己成長感尺度の各項目平均値との相関係数（ r ）を算出したところ、37項目で0.1%水準の有意な相関係数（.34～.67）が確認されたため、分析にはその37項目を使用した（表4参照）。

③Big5（「開放性」「誠実性」）

研究1をふまえ、自己成長感尺度の下位尺度である「他者への誠実な態度」の構成概念妥当性を測る尺度として、和田（1996）のBig5尺度より「開放性」と「誠実性」の各下位尺度項目を抽出して使用した。各下位尺度は12項目ずつから成っているが、表現のわかりづらい項目は削除し、「誠実性」については10項目を採用した。なお、各質問には現在の自分がどの程度あてはまるかを「まったくあてはまらない：－3点」～「非常にあてはまる：＋3点」の7件法で回答させた。

④「他者受容」

研究1をふまえ、自己成長感尺度の下位尺度である「他者尊重」の構成概念妥当性を測る尺度として、対人関係尺度（高井、1999）の「他者受容」7項目を抽出して使用した。各質問には現在の自分がどの程度あてはまるかを「まったくあてはまらない：－2点」～「よくあてはまる：＋2点」の5件法で回答させた。

【結果】

(1) 自己成長感尺度の因子分析

自己成長感尺度37項目を用いて、主因子法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子負荷量.40以上であること、複数の因子に.30以上の負荷がまたがっていないこと、解釈可能性を考慮し、28項目2因子構造（累積寄与率38%： $\alpha = .887$ ）を採用した（表5参照）。

第1因子では、ストレスにさらされても動じないといった精神的な安定感や物事をポジティブにとらえるといった楽観性、および自分自身に対する信頼感に関する項目で高い負荷が示されたため、「自己信頼感（ $\alpha = .898$ ）」と命名した。第2因子では、他者尊重や他者となつがっている感覚に関する項目で高い負荷が示されたため、「他者とのつながり感覚（ $\alpha = .826$ ）」と命名した。因子間相関は.32であった。

また、元の尺度であるRSRGSの各下位尺度は、第1因子には「人格的強さ」「情動統制」「自己理解」「楽観性」に関する項目が、第2因子には「他者とのかかわり」「所属感」に関する項目が、それぞれ含まれていた。

なお、以下の分析には、各因子の項目得点を合計しそれを各因子の項目数で割った下位尺度得点を算出して使用した。

(2) 「開放性」「誠実性」および「他者受容」との関連

Big5（和田、1996）の「開放性」「誠実性」各

注(2) 研究2における最も強いストレスイベントは研究1で使用した16項目に、「受験」「恋愛関係（失恋以外）」「身近な人の死」の3項目を加えた、計19項目を使用した（この3項目は研究1において「その他」の欄に複数人が記述していたものである）。

表4. 自己成長感尺度の項目と自己成長感得点との相関係数

	自己成長感得点
1. 自分がいかに強いかという信念	.53 ***
2. 人を受け容れること	.42 ***
3. 人の感情や信念を尊重すること	.35 ***
4. 人を思いやること	.42 ***
5. 自分の生活に対する満足感	.55 ***
6. 物事をポジティブにとらえること	.66 ***
7. 自分のしたことに対して責任を取ること	.44 ***
8. 物事を当たりまえのことと思わないこと	.34 ***
9. 何事も自分自身で決められる能力	.48 ***
10. 自分には生きる価値があるという感覚	.61 ***
12. 困難を乗り越えてきた人々の強さに対する理解	.45 ***
13. 悪いことが起こっても気が動転しないこと	.50 ***
14. 自分の行動の結果について考えること	.41 ***
15. 物事に腹を立てないこと	.38 ***
16. 楽観的であること	.46 ***
17. 落ち着いて生活に取り組むこと	.60 ***
18. 他者が望むような私ではなく、本当の私であること	.45 ***
19. 完璧ではない自分自身を受け容れること	.47 ***
20. 人生を真剣に受け止めること	.49 ***
21. あきらめずに問題に取り組むこと	.67 ***
22. 自分自身に対する信頼感	.65 ***
24. 人が私に向かって話をしているときには、しっかり聞くこと	.44 ***
25. 人を助けるために手を差し伸べること	.43 ***
26. 新しい情報や考えを抵抗なく受け入れること	.56 ***
27. 人と誠実にやりとりをすること	.46 ***
28. 自分にとってよくわからないことにぶつかってもあわてないこと	.62 ***
30. 些細なことで心が乱されないこと	.44 ***
32. 自分を心配してくれるたくさんの人がいるという認識	.39 ***
33. すべてのことには理由があるという考え方	.39 ***
34. 居場所があるという感覚	.43 ***
35. 周囲の人と密接なつながりを持っているという感覚	.38 ***
36. 人間の力を超えた何かがあるという信念	.36 ***
37. 対立にうまく対応する能力	.62 ***
38. 自分が生きることの意義	.53 ***
39. 自分にとって特に大事な人との関係の大切さ	.37 ***
40. 自分の感情を表現する能力	.42 ***
41. 人にいろいろなことをしてあげられるという感覚	.61 ***

 $p < .001$

表 5. 研究 2 における自己成長感尺度の因子分析 (主因子法 Promax 回転)

	I	II
第1因子 自己信頼感($\alpha=.898$)		
28. 自分にとってよくわからないことにぶつかってもあわてないこと	.72	-.03
6. 物事をポジティブにとらえること	.70	.06
22. 自分自身に対する信頼感	.70	.03
13. 悪いことが起こっても気が動転しないこと	.69	-.21
30. 些細なことで心が乱されないこと	.69	-.21
17. 落ち着いて生活に取り組むこと	.63	.01
1. 自分がいかに強いかという信念	.62	.00
37. 対立にうまく対応する能力	.62	.07
10. 自分には生きる価値があるという感覚	.56	.15
9. 何事も自分自身で決められる能力	.56	.01
16. 楽観的であること	.54	-.03
38. 自分が生きることの意義	.51	.16
19. 完璧ではない自分自身を受け容れること	.50	.02
5. 自分の生活に対する満足感	.49	.11
15. 物事に腹を立てないこと	.48	-.06
18. 他者が望むような私ではなく、本当の私であること	.43	.02
第2因子 他者つながり感($\alpha=.826$)		
4. 人を思いやること	-.10	.67
3. 人の感情や信念を尊重すること	-.07	.65
25. 人を助けるために手を差し伸べること	-.06	.60
35. 周囲の人と密接なつながりを持っているという感覚	-.01	.57
39. 自分にとって特に大事な人との関係の大切さ	-.01	.55
34. 居場所があるという感覚	.18	.54
32. 自分を心配してくれるたくさんの人がいるという認識	-.01	.52
7. 自分のしたことに対して責任を取ること	.10	.51
27. 人と誠実にやりとりをすること	.06	.49
33. すべてのことには理由があるという考え方	-.05	.48
24. 人が私に向かって話をしているときには、しっかり聞くこと	.07	.42
8. 物事を当たりまえのことと思わないこと	-.03	.41
因子間相関		
I	—	.27
II		—

下位尺度に関する22項目について、主因子法バリマックス回転による因子分析を行ったところ、元の尺度の因子構造と同様の「開放性 ($\alpha=.826$)」と「誠実性 ($\alpha=.818$)」の2因子が抽出された(表6参照)。また、対人関係尺度(高井、1999)の「他者受容」7項目($\alpha=.692$)について主因子法による因子分析を行ったところ、1因子が抽出された(表7参照)。

そこで、各下位尺度得点を算出し、自己成長感尺度の各下位尺度と「開放性」「誠実性」「他者受

容」との相関を Pearson の積率相関係数 (r) を用いて算出した(表8参照)。

その結果、自己成長感尺度の「他者とのつながり感覚」と「他者受容」の間で弱い正の相関(.29)が見られた。しかし、自己成長感尺度の各下位尺度と「開放性」「誠実性」との間には有意な相関は見られなかった。

表 6. Big5の因子分析（主因子法 Varimax 回転）

	I	II	共通性
開放性 ($\alpha=.826$)			
3. 多才な	.72	.04	.52
1. 独創的な	.61	-.12	.39
12. 頭の回転の速い	.61	.22	.42
19. 独立した	.59	.05	.36
7. 洞察力のある	.58	-.06	.35
9. 想像力に富んだ	.58	-.21	.38
5. 進歩的	.57	.17	.35
10. 美的感覚の鋭い	.50	-.01	.25
18. 好奇心が強い	.44	-.04	.20
14. 臨機応変な	.43	.10	.19
21. 呑み込みの速い	.42	-.01	.17
16. 興味の広い	.37	-.03	.14
誠実性 ($\alpha=.818$)			
6. 怠惰な	-.09	.71	.52
2. いい加減な	.00	.69	.47
4. ルーズな	-.14	.64	.43
8. 成り行きまかせ	-.01	.60	.36
15. 軽率な	.06	.58	.34
11. 計画性のある	.28	.57	.40
13. 無頓着な	.03	.47	.22
17. 勤勉な	.26	.46	.28
22. 飽きっぽい	-.04	.45	.21
20. 几帳面な	-.06	.33	.11
因子寄与	3.74	3.32	7.06
寄与率	17.00	15.10	32.10

表 7. 対人関係尺度の因子分析（主因子法）

	I
他者受容 ($\alpha=.692$)	
4. 私はいつも相手を理解しようと心がけている	.59
3. 私は人のことでも、自分のことのように感じるが多い	.54
2. 私は人のよいところ、優れているところを進んでほめる	.52
1. 私はちょっとしたことでも、人を世話をあげることが楽しい	.51
7. 私は自分と合わない相手でも、その人の優れている点は認めることができる	.49
5. 私は人のあやまちを気持ちよく許せるほうである	.46
6. 私は相手の良いところも悪いところも、ありのままに受け入れられる	.36

表 8. 自己成長感尺度と BIG5および対人関係尺度との相関係数

		自己信頼感	他者つながり感
Big5	開放性	-.04	.00
	誠実性	-.08	-.07
対人関係尺度	他者受容	.11	.29 ***

 $p<.001$

【総合考察】

(1) 自己成長感尺度の因子構造

研究1と研究2で、自己成長感尺度は異なる因子構造を見せた。まず、その理由について考えてみたい。考えられる大きな理由として、調査対象者の学年の違いが考えられる。各研究における主な調査対象者の学年は、研究1では3・4年生(全体の65%)であったのに対し、研究2では1・2年生(全体の95%)であった。本大学では3・4年生になるとゼミや実習、就職活動、卒業論文などが始まるため、1・2年生が経験したことのないよりストレスフルなイベントを3・4年生は経験している可能性が高い。経験が異なれば成長感の質も異なるということは容易に想像でき、このことが研究1と研究2の結果の差に影響を与えていると考えられる。

次に、自己成長感の構造について考えてみたい。研究2における自己成長感尺度の各下位尺度の項目内容を見てみると、「他者とのつながり感覚」の項目の中に、研究1における「他者への誠実な態度」「他者つながり感」「他者尊重」の項目が含まれており、研究1において因子間相関が高かった「他者つながり感」と「他者への誠実な態度」および「他者尊重」とが組み合わさって一つの因子を構成する形となったと考えられる。一方、「自己信頼感」には研究1における「自己安定感」の項目が高い負荷を示しており、「自己信頼感」を構成する形になったと考えられる。したがって、自己成長感には大きく分けて『自己内の成長感』と『他者との関係にかかわる成長感』の二つの成長感があると考えられよう。また、3・4年生中心の研究1と1・2年生中心の研究2で、『他者との関係にかかわる成長感』の下位尺度の数が3因子から1因子になったことから、大学生においては学年が上がるに連れて『他者との関係にかかわる成長感』が分化していく可能性が考えられた。

ところで、自己成長感尺度の元の尺度である Armeli et al. (2001) の RSRGS と、本論文で作成を試みた自己成長感尺度では異なる因子構造

となった。以下では、そのことについて考えたい。その理由としてまず考えられるのは、最もストレスフルなイベントとして選択されたストレスイベントの違いである。Armeli et al. (2001) は、大学生478名(女性56%、大学一年生63%、平均年齢18.6歳(SD=1.6))を対象に、RSRGSの妥当性を検討している。したがって、サンプルの年齢については本論文のサンプルとほとんど変わらない。しかし、選択された最もストレスフルなイベントの内容を見てみると、other death (friend, relative) が24%と最も多く、romantic problem (17%)、family events (fights with family) (8%) と続いている。一方、本論文において最も多かったのは、「アルバイト」や「部活・サークル活動」、「友人関係」や「恋愛関係」など、広い意味で人間関係にかかわるイベントであり(2つの研究それぞれで50%程度を占めている)、「死」にかかわるイベントを最もストレスフルなイベントとして選択した者は、2つの研究それぞれで、わずか5%未満であった。

また、もう一つの理由として、RSRGSの因子構造の妥当性に問題があるかもしれないことである。Armeli et al. (2001) は、確認的因子分析を用いて、RSRGSが7因子構造であることの妥当性を検討している。その根拠は、1因子性を仮定した確認的因子分析では当てはまりがわるかったが($\chi^2_{(152)}=1557.76(p<.05)$, GFI=.74, TLI=.56, CFI=.61, RMSEA=.14)、7因子性を仮定して確認的因子分析を行うと当てはまりがよく($\chi^2_{(131)}=377.38(p<.05)$, GFI=.92, TLI=.91, CFI=.93, RMSEA=.06)、さらに、7因子モデルの1因子性を仮定した二次因子分析を行ったところ、当てはまりがよかった($\chi^2_{(145)}=452.41(p<.05)$, GFI=.91, TLI=.90, CFI=.91, RMSEA=.07)ためであるとしている。しかし、尺度の2因子性や3因子性といった1因子性と7因子性以外を仮定した分析についての記述はなく、本当に7因子が妥当であるかについては疑問が残る。ただ、二次因子分析の結果はRSRGSが基本的に1因子構造である可能性を示していると考えられる。また、RSRGSが改定される前の尺度であ

るSRGS (Park et al., 1996) も1因子構造であった。したがって、RSRGSの7因子構造自体に問題があったのかもしれないと考えられよう。

しかし、RSRGSが1因子構造であったとしても、日本において2因子構造になったのはなぜだろうか。これには文化的自己観について研究したMarkus&Kitayama (1991) と高田 (2004) の研究が参考となるだろう。

Markus&Kitayama (1991) は、米国人は自己を他者から切り離して捉えるが(相互独立的自己観)、日本人は自己を他者と結びついた人間関係の一部として捉える(相互協調的自己観)ということをそれぞれの文化における自己感の特徴として述べている。したがって、日本人の自己成長感においては、他者から切り離された成長感(『自己内の成長感』)の他に、他者との関係のなかで感じられる成長感(『他者との関係にかかわる成長感』)が生じるのではないだろうか。また、高田 (2004) は、児童期から青年期にかけての調査対象に対する研究から、相互独立性は青年期に低下し、相互協調性は青年期に増大することを明らかにしている。つまり、日本人大学生は自分自身のことよりも他者との親和や調和を大切にするということである。このことは本論文において、最もストレスフルなイベントとして広い意味での人間関係が全体の半分を占めていたことからもうかがうことができよう。すなわち、日本人大学生は他者との関係を重視しており、そのために人間関係にかかわるストレスを最もストレスフルに感じるのだろう。したがって、日本人大学生において、自己成長感尺度が『自己内の成長感』と『他者との関係にかかわる成長感』の2因子構造になることは妥当なことであるように思われる。

(2) 自己成長感尺度の信頼性および妥当性の検討

2つの研究における自己成長感尺度の α 係数は.88以上、各下位尺度の α 係数も.82以上であり、十分に高い内的整合性を示した。したがって、自己成長感尺度の信頼性は高いと言えよう。

次に妥当性に関して検討する。研究1において、自己成長感尺度の「自己安定感」と自己肯定意識尺度の対自己領域の下位尺度である「自己実現的態度」および「充実感」の間にそれぞれ弱い正の相関が見られた。「自己安定感」は多少の困難にぶつかっても動じずに自分の目標に向かっていける強さのようなものを意味していると考えられ、「自己安定感」の妥当性が確認されたと言える。また、これは「自己安定感」が自己成長感尺度における「自己」領域の下位尺度であることの妥当性も示していると言えよう。

また、研究1において、自己成長感尺度の「他者つながり感」と自己肯定意識尺度の対他者領域の下位尺度である「自己閉鎖性」の間に中程度の負の相関が見られた。「自己閉鎖性」とは他者に自分の心をひらかないことを意味するものであり、これと他者と密接なつながりを意識することを意味する「他者つながり感」が負の相関を示したということはこの概念の妥当性を示していると言えるだろう。

さらに研究2において、自己成長感尺度の「他者とのつながり感覚」と対人関係尺度の「他者受容」の間に弱い正の相関が見られたことは、「他者とのつながり感覚」に含まれている研究1の「自己尊重」との相関が確認されたと言い換えられるだろう。以上より、自己成長感尺度の信頼性は高く、妥当性もある程度確認されたと言え、自己成長感尺度は日本人の自己成長感をはかる尺度として適用可能であると思われる。

しかし、研究2において、Big5の「開放性」「誠実性」と自己成長感尺度の各下位尺度の間に有意な相関は見られなかった。そもそも研究2においてBig5の「開放性」「誠実性」の項目を構成概念妥当性尺度として用いたのは、研究1で抽出された「他者への誠実な態度」について検討するためであった。しかし、研究2では研究1と因子構造が異なっていたため、「開放性」「誠実性」との有意な相関が見出されなかった可能性が高い。また、自己成長感尺度が測っている「他者への誠実な態度」と、Big5の測っている「開放性」と「誠実性」とは、同じ「誠実」という名称が用い

られているとはいえ、それぞれ行動への認知と性格特性という異なる側面を測定している尺度であったと考えられる。したがって自己成長感尺度の信頼性と方向性は確認されたとはいえ、今後も他の尺度を用いて更なる妥当性の検討が必要であると考えられる。

【謝辞】

本論文をまとめるにあたり、貴重なご意見をくださった、最後まであたたかくご指導してくださいました今川民雄先生に深く感謝致します。また、今川研究室の諸先輩方にも大変お世話になりました。ここに記し感謝申し上げます。

【引用文献】

- Armeli, S., Gunthert, K. C., & Cohen, L. H. (2001). Stressor Appraisals, Coping, and Post-event Outcomes : Dimensionality and Antecedents of Stress-related Growth. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 20(3), 366-395
- Caplan, G. (1964). Principles of Preventive Psychiatry. Basic Books : New York (新福尚武 (監訳) (1970). 予防精神医学. 朝倉書店)
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (2001). 死別経験による遺族の人間の成長. 死の臨床, 24, 69-74
- 平石賢二 (1990). 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康. 教育心理学研究, 38, 320-329
- 川崎陽子・高橋道子 (2006). 高齢者介護を通しての家族介護者の発達に関する一考察. 東京学芸大学紀要, 57, 115-126
- Linley, P. A. & Joseph, S. (2004). Positive Change Following Trauma and Adversity : A Review. *Journal of Traumatic Stress*, 17(1), 11-21
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253
- 大塚俊弘・中根允文 (2000). 精神科診断学体系における PTSD 概念の位置づけ. 松下正明 (編) (2000). 臨床精神医学講座『外傷後ストレス障害 (PTSD)』. 中山書店, 3-13
- Park, C. L. (1998). Stress-Related Growth and Thriving Through Coping : The Roles of Personality and Cognitive Processes. *Journal of Social Issues*, 54(2), 267-277
- Park, C. L., Cohen, L. H. & Murch, R. L. (1996). Assessment and Prediction of Stress-Related Growth. *Journal of Personality*, 64(1), 71-105
- Park, C. L. & Helgeson, V. S. (2006). Introduction to the Special Section : Growth Following Highly Stressful Life Events—Current Status and Future Directions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 74, 791-796
- 坂口幸弘 (2002). 死別後の心理的プロセスにおける意味の役割 : 有益性発見に関する検討. 心理学研究, 73, 275-280
- 櫻井成美 (1999). 介護肯定感をもつ負担軽減効果. 心理学研究, 70, 203-210
- Tedeschi, R. G. & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory : Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9(3), 455-472
- 高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究. 教育心理学研究, 47, 317-327
- 高田利武 (2004). 日本人らしさの発達社会心理学—自己・社会的比較・文化. ナカニシヤ出版
- 宅香菜子 (2004). 高校生における「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」の構築—自我の発達プロセスのさらなる理解にむけて. 心理臨床学研究, 22(2), 181-186
- 宅香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレスに対する意味の付与に着目して. 心理臨床学研究, 23(2), 161-172
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67
- 渡邊照美・岡本裕子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連. 発達心理学研究, 16(3), 247-256